

東京都多摩地域に残る

稲作農業の遺跡を訪ねて

1 はじめに

小俣軍平

東京都の三多摩地域には、日本地理のなかで「谷戸」または「谷地」と呼ばれる特異な地形が今でもあります。この場所の特徴は、次の写真のように奥に丘陵があり、それに向かって左右に同じように丘陵地があります。日本列島に人が住むようになった古生代から、関東地方ではこうした地形が日本人にとって生活の場所として一番好まれてきたようです。

こうした場所については、これまで月報で多摩丘陵での縄文・弥生時代の土器や石器・石斧・黒曜石の採集、絶滅の恐れのある動植物の保護・保全や都市開発問題について報告してきましたが、今回は農業（米作り）とのかかわりについて報告いたします。

1：図



2：図



3：図



上掲の三つの図は、八王子市川町のものですが、この街には奈良・平安あるいはそれよりも昔の時代からこの場所で世代を重ねて生活しておられる方がいらっしゃいます。

4：図 坂本様のご自宅



5：図 坂本様 御夫妻



1：図と2：図が坂本様の水田です。2：図の奥に、次の6：図のような池があります。水田1枚分ほどの大きさですが、実はこれが谷戸の米作りの歴史を秘めた文化遺産なのです。

6：図



谷戸の水田では丘陵地の林から出てくる湧水を利用していますが、この水は冷たくそのままでは稲の育ちが悪くなります。そこで湧水を一時ためて日光を利用して温めて水田にひきこみます。開発前の多摩丘陵では各所にこのような池がありました。しかし1964年の東京オリンピックを契機に始まった開発から半世紀、最近は見かけることがありませんでした。八王子市川町の坂本様の水田には、この池が今も残っています。

湧水を温める池といえば、コンクリートで囲われたものを想像しがちですが、この池はそうではなく素掘りの池です、素掘りの池では水が逃げてしまうのでは・・・と思いますが、富士・箱根火山帯の火山灰が形成している東京都多摩地方のローム層は、その心配はありません。6：図の奥の林床をのぞいてみますと、湧水の流れがあります。

7：図



流れはわずかなもので、これをそのまま引き込んでもこの谷戸の水田の必要とする水量には及びもつきません。しかし秋・冬から翌年の春まで湧水をしっかりため込みますと、田植えができます。その後の田んぼへの給水もバッチリです。

遠い遠い昔から大切に守られてきたこの池には、ゲンジボタル・ヘイケボタル・・・どんな水生生物が生息しているのでしょうか。坂本様をお願いして、今後この池で調査をさせて頂こうと思っております。

8：図



8：図 池の淵は、濾水・崩壊の心配は全くありません。ホタルの幼虫がいれば、蛹化のために四月末に上陸するのも好都合です。淵の林内には、陸生ホタルのクロマドやムネクリ・オバなどがいるかもしれません。この先の初夏の羽化が楽しみです。これまでさなぎの未発見がある、カタモンミナミの幼虫がいたら最高ですね。

川町のように恵まれた生息地があるかと思えば、一方で、水生のゲンジボタルやヘイケボタル・スジグロボタルにとって、今年の春は多摩丘陵で困った事態がおきています。

9：図



10：図



9：図の右側、丘陵地との境に10：図のようなわずかな湧水があります。(赤線のところ)、2年前に寺沢川で発見された例の小型ゲンジボタルが、ここにも生息しているのですが、ご覧のように今年は、すっかり水が枯れています。こうした事態に対して、このゲンジの幼虫は、土の中にもぐって避難する術を心得ているはずですが、どうでしょうか。近いうちにまとまった雨が降ってくれるといいのですが、6月の羽化の時期が気になります。

寄付・カンパのおしらせ

東京都在住の 小谷田 忠一良 様 10000円

伊藤 正弘・理子 御夫妻 様 30000円

有難うございました。心から厚く御礼申し上げます。

あとがき

今年の春は、前回の月報で報告したように、調査中に山火事に遭遇した事件があったり、街中で人が突然刺されるとか、登校中の小学生が行方不明となるなど、どうしても不穏な出来事が続いて落ち着かず、陸生ホタルの越冬状況の調査が思うようにできませんでした。板当沢時代からの28年間で初めてのことです。人間社会が世界的にも無謀で身勝手な戦争続きで不安定なためでしょうか。太平洋戦争時代に小学生で、アメリカ空軍の機銃掃射を受けたことのあるわたくしは、TVの戦争報道をみながら、「戦争をやめろ!!」と毎日さげんでいます。

陸生ホタルの幼虫調査で、ここ3年程ホタルの幼虫だけでなく、土壤生物全体が激減していますが、先日の午前11時頃、我が家の庭先に「ヤモリ」が久しぶりに姿をみせてくれました。よくぞ生き残っていてくれて・・・と、写真はとりそこないましたが思わず万歳でした。